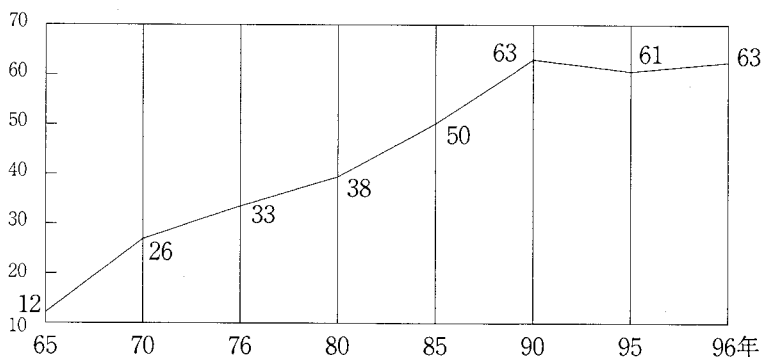


図表3 神戸市の占い店舗数



占い師はその実力によって知名度と信頼をえ、そして集客も可能となるのであり、実力を欠いていれば当然客はやってこず、占い師として生計をなしたりたせることができないからである。とくに「宅占」の場合、占い師の自宅は必ずしも繁華街にあるわけではないから、このことはなおさら集客のためにその実力を必要とすることになる。実力を必要とするということは、占い師一人でテナントを借りて占いをしている場合もあてはまるかもしれない。ただし、「宅占」とは異なり、比較的繁華街にそのテナントが構えられる傾向があり、集客の機会はあるだろう<sup>9)</sup>。それに対して、「街占」や「イベント」、そして複数の占い師との共同のテナントや「占いの街」のような形態は、集客に対するコストやリスクを低くしたり、分散しうる。このことはそうした形態をとる占い師に実力がないということの意味しているわけではない。ただ、「街占」や「占いの街」などのような形態であれば、例えばテナントのコストを低くすることができるし「街占」の形態であれば、まさしくテナントのコストは無料となる一、繁華街に店舗が出されることが多いために集客のリスクやコストを小さくもでき、占い師にとってはお手軽な形態でもある。

「街占」という占い空間の形態は、占いの店舗に

まつわる様々なコストやリスクを低くしうる形態であり、もっともおこないやすい形態であったと思われる。また、このことから占い師になったばかりの者にとっても、非常にとりやすい形態でもあつたろう<sup>10)</sup>。これらのことから、「街占」という形態は、占い空間の形態のなかでも主要なものであつたとみなせるかもしれない。しかし、近年、そうしたことに変化をみることができる。すなわち、今日、「街占」という形態の占い空間が決してなくなってしまっているわけではないが、以前のように見ることができなくなりつつある、あるいは少なくなりつつあると思われる。例えば、そのことは雑誌記事の見出しから窺える<sup>11)</sup>。占いの空間形態を表す「街頭」、「大道」や「占いデパート」などの表現が用いられている見出しに限定して見ていくと、一九八〇年以前と以降とはその傾向が異なっている。一九八〇年以前においては以下の例が典型としてある。

- 「大道易者繁盛記」『週刊朝日別冊』1950.8.5
- 「占いに見る世相のうら側“迷える子羊”たちと大道易者の間」『週刊文春』1961.12.4
- 「全国よくあたる街頭占い師80人紹介 恋愛・結婚・金運などピタリ」『週刊女性』1971.3.13

9) 筆者の調査によれば、必ずしも熟練の占い師だけが「宅占」をしているわけではなく、比較的経験の浅い占い師も「宅占」をしていたり、テナントを一人で借りておこなっている場合があつた。  
 10) 露木まさひろ(1993)は、かなりの実力ないし知名度を持った占い師でも「困っている人の手助けをしたい」一身から、少しでも多くの人を観ることができるよう、あえて「街占」をしているということを、報告している。  
 11) 『大宅文庫』大項目「宗教・思想」、中項目「易占」、小項目「易術一般」に限定。